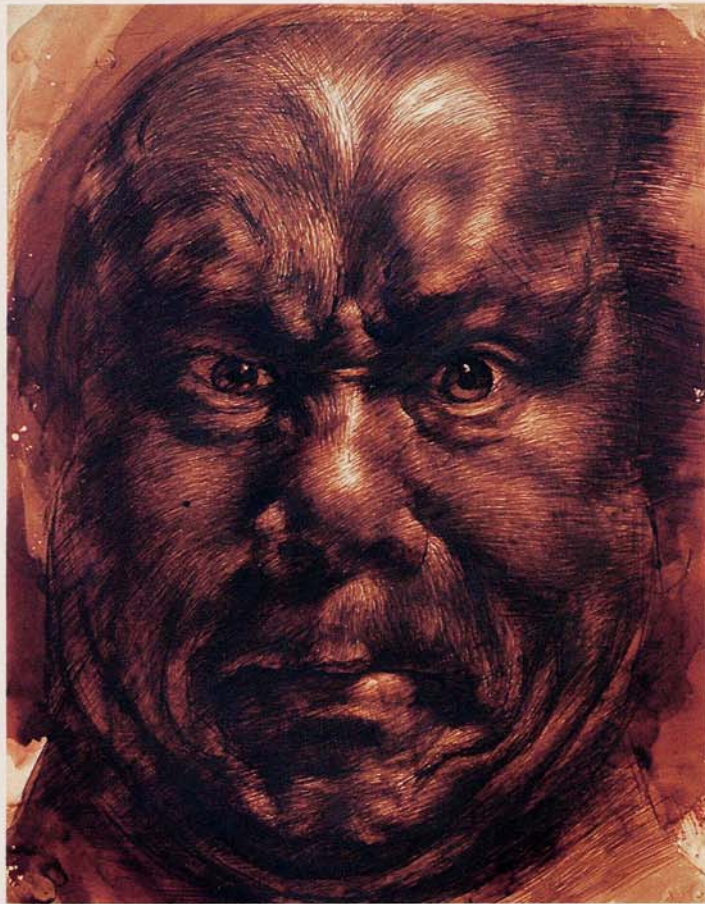


一宮市
博物館
だより

No.27 2000.10



笈忠治〈自画像20〉1930年

笈 忠 治 KAKEHI Chuji

平成12年10月21日(土)～11月23日(木)



《自画像》1935年

笈忠治は、明治四十一年（一九〇八）三月三十日、現在の愛知県尾西市で機屋を営んでいた笈六太郎の子として萩原町大字東宮重（現・一宮市）に生まれ、八歳の時父に伴って名古屋に転居して以来九十二歳の今日に至るまで名古屋市に在住しています。

十三歳の年に父親を亡くすという厳しい家庭環境のなか、高等小学校卒業後、愛知県測候所（現・名古屋地方気象台）に勤めながら画家を志していた笈が本格的に絵の道へ進むきっかけとなったのは、当時帝展の若手作家として活躍していた松下春雄との出会いでした。十六歳の時、笈王山で写生中に松下から声をかけられ、彼の誘いを受けて、前年に松下・鬼頭鍋三郎・中野安次郎らが興した美術研究グループ・サンサシオンの研究所に通うようになったのです。しかし、自分の求める方向性との違いを感じた笈は、翌年にはそこを辞して、中部画壇の先駆者の一人である鈴木不知の名古屋洋画研究所に移り本格的にデッサンを学びます。不知は、放任主義的な自由研究を重んじたためほとんど助言を与えなかったといわれますが、むしろ



《ボニ-3》1990年

笈にとっては、そこで目にした画集を通じて出会ったレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、デュラニー、レンブラントといった画家たちの仕事、その後の芸術形成に大きな影響を与えることになりました。研究所には一年半ほど通いましたが、そこを辞めた後は、しばらく画壇との交流を絶ち、測候所勤務のかたわら、独学ともいえる環境のなかで独自の画境の創造を目指してきました。そして、昭和二十四年の第三回中部日本美術展に、十年の歳月をかけた大作《虫眼鏡を持てる老母》で衝撃的なデビューを果たします。この絵は、塗り重ねた絵具の盛り上がりで厚さが数センチにもおよび、中美展のなかでも最大の話題作となりました。その後二度公募展に出品したものの、自信をもって出品したペンによる自画像が落選したことなどで、以後公募展との関わりを絶ち、またもや沈黙することになりました。

ようやく個展を開き作品を発表するようになるのは定年を過ぎてからのことで、以来、美術関係者やジャーナリストたちの関心を呼び、平成十年には刈谷市美術館で初の全貌展が開かれ、今春には、

岐阜県より、江戸前期に多数の木彫仏を残した美濃出身の僧・円空に因んで制定された「第一回円空大賞」円空賞を受賞しました。十代から描き続けている「自画像」は六〇〇点以上におよび、まるで仁王像を思わすその気迫に満ちた作品群は観る者を圧倒し、「自画像の画家」として、笈の特異な世界は高い評価を得ています。四十代から描きはじめた「花」はその数約五六〇点。そして、八十歳前後には名作「猫」シリーズを生み、老いてなお精力的に創作活動を行っています。わが国の近現代美術の流れに迎合せず、対象を凝視し、ひとつの主題を徹底的に追求する、その一途に描かれた作品の数々は、時代を超えた普遍的な美を感じさせます。

この展覧会は、笈忠治の七十五周年にわたる画業の歩みを、自画像、肖像、猫、風景、静物などの代表的な作品八十六点によって紹介するものです。公募展とはほとんど無縁な関係を保ちながら、自画像に独自の画境を極めた笈忠治の世界をぜひご鑑賞下さい。

- 会 期：2000年10月21日(土)～11月23日(木)
- 休 館 日：毎週月曜日（11月4日(土)は開館）
- 開館時間：午前9時30分～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
※ただし10月21日は午後1時から一般公開
- 観 覧 料：一 般400円
高・大学生200円
小・中学生100円
（常設展を含む/20名以上の団体は2割引）
※第2・第4土曜日は小・中学生無料。満65歳以上で、一宮市発行の「老人医療受給者証」あるいは「シルバー優待証明カード」持参の方は無料。
- 講 演 会：聴講無料
- 日 時：11月3日(金) 午後1時30分～3時
- 会 場：妙興寺公民館（博物館東）
- 講 師：美術評論家 三頭谷鷹史氏
- テ ー マ：「笈忠治、密室のなかの自画像」

アンケートに見る20世紀

～20世紀写真展から～

五月二十七日（土）から六月二十五日（日）まで「二〇世紀写真展」が開催されました。ここではそのアンケート結果から、来館者の二〇世紀に対する視点をさぐってみたいと思います。

期間中の来館者数は一四五六名、回収されたアンケート用紙は五一七枚で、回収率は約三十六パーセントです。今回のアンケートでは、年齢や性別などの基本事項に加え、「展覧会で一番印象に残った写真」と「二〇世紀で最も印象に残った出来事」の二つの質問を設けました。印象に残った写真については、日本と世界の出来事の写真五〇枚（展示写真一覽表参照）から一枚を選択してもらい、写真を複数選択したアンケートは「無効・未解答」として集計しました。印象に残った出来事については、制限を設けず自由に記入してもらいました。アンケート回答者の中心層は六〇代で、全体の四分の一を占めます。

「展覧会で一番印象に残った写真」

比較的均等に各写真が選択されましたが、そのなかでも「伊勢湾台風」と「阪神淡路大震災」を選択された方が多く、両写真とも約十パーセントの人が選択しています。他には「真珠湾攻撃・太平洋戦争開戦」が六パーセント、「広島に原爆投下」が八パーセント、「アポロ十一号月面着陸」が五パーセントを占めています。

男女別にみると、男性では、「真珠湾攻撃・太平洋戦争開戦」「広島に原爆投下」「伊勢湾台風」がそれぞれ十パーセント前後を占めています。特に六〇代後半以降の年齢の方では、戦争に関連する前者二枚を選択した方が三割近くを占めます。女性でもっとも関心が高かったのは「阪神淡路大

震災」の写真で、十四パーセントもの人が選択しています。「広島に原爆投下」と「伊勢湾台風」もそれぞれ約十パーセントの方が選択しています。男女で差が際だったのは「真珠湾攻撃・太平洋戦争開戦」と「阪神淡路大震災」の写真です。男性で前者を選択した人は約九パーセントですが、女性では二パーセントほどです。その反面、女性の十四パーセントもの人が選択した大震災の写真について、男性で選択した方は六パーセントほどです。

「二〇世紀で最も印象に残った出来事」

全体に多く見られたのは、地震や原発事故など、近年の災害に対する意見です。小中学生のアンケートには、家族のことや自分自身の出来事を記すことが多く、年齢が上がるにしたがって世界や社会に目がいくようになっていく様子がわかります。男性の若い世代では、スポーツに関する記述が見られます。女性の若年層では、アイドルグループのデビューや解散、ライブなど、芸能関係の出来事が目を引きました。二〇～五〇代の世代からは、少年犯罪の多発や南北朝鮮首脳会談などに対する幅広い意見が寄せられました。なかでも男性には現在の不況やバブル経済に対する記述が、女性に

は伊勢湾台風に対する記述が多くみられました。六〇代以降の方からは戦中戦後の経験談が寄せられ、一宮市が空襲にさらされた日や終戦の日のことなどが記されました。

アンケート結果から

展示された写真から当時の生活を思い出したださる方が多く、アンケートが写真や解説文に誘導された可能性も考慮せねばなりません。ここでは単純にアンケート結果を述べたいと思います。

全体に戦争と災害に関する出来事が関心を集めたといえます。第二次世界大戦や伊勢湾台風、阪神淡路大震災に関しては、関連写真を多くの人が選択したことからその関心が窺われますが、それら以外にも湾岸戦争や台湾大地震、有珠山の噴火などを想起された方が多くいました。東京オリンピックや大阪万博などの催しへの関心もみられました。また、明るい話題に対してよりも、衝撃的な出来事に対する記憶の方が強いようです。

二〇世紀も今年で終わりです。みなさんもこの一〇〇年を一度振り返ってみてはいかがでしょうか。

（谷口 純一）

展示写真一覽表

1900年	パリ万国博覧会
1903年	ライト兄弟、初の動力飛行
1904年	日本海海戦（日露戦争）
1912年	日本選手、オリンピック初参加
1914年	第1次世界大戦
1917年	ロシア革命
1918年	米騒動
1923年	関東大震災
1926年	普通選挙法公布と男女同権
1926年	ラジオ放送開始
1927年	ランドパークがニューヨーク・パリ間 単独無着陸飛行
1929年	暗黒の木曜日・ ウォール街株式市場大暴落
1932年	農村恐慌
1936年	2・26事件
1936年	カフェー
1941年	真珠湾攻撃・太平洋戦争開戦
1945年	広島に原爆投下
1946年	やみ市
1950年	朝鮮戦争
1951年	サンフランシスコ講和条約
1953年	テレビ放送開始・街頭テレビ
1956年	大規模団地
1959年	伊勢湾台風
1960年	安保闘争
1961年	ガガーリン初の宇宙旅行
1961年	高度成長
1962年	キューバ危機
1963年	ケネディ暗殺
1964年	東京オリンピック
1966年	ビートルズ来日
1967年	四日市公害
1968年	高速道路・マイカー時代
1969年	アポロ11号月面着陸
1969年	フォークケリラ
1970年	大阪万国博覧会
1972年	横井庄一さんガムで発見
1973年	オイルショック・ トイレットペーパーパニック
1975年	ベトナム戦争終結
1985年	オゾンホール
1986年	チェルノブイリ原発事故
1987年	バブル経済・地上げ
1989年	ベルリンの壁崩壊
1991年	民族紛争・ユーゴ内戦
1992年	PKO
1994年	南アフリカに初の黒人大統領
1994年	中華航空機事故
1995年	阪神淡路大震災
1997年	海洋汚染・ロシアタンカー事故
1997年	クローン羊・ドリー誕生
1998年	サッカーWカップ・ フランス大会に日本初出場

勝曼譜善知鳥版画巻 抜粹九柵十二図

作者／棟方志功

制作年／一九三八年（昭和十三年）

技法・材質・形状／版画・無彩色・シート

版木寸法／三二・五×四三cm

平成十一年度購入

棟方志功は、一宮市萩原町出身の象徴派詩人・佐藤一英の長篇詩「大和し美し」を昭和十一年に版画巻として制作し、これが民藝運動を展開していた柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らに認められ、世界的版画家となる足掛かりをつかみました。志功はその後も、一英の詩をもとに「空海頌」「東北経鬼門譜」（ともに昭和十二年制作）といった版画大作を制作しています。当館では志功に関わる展覧会を何度か開催していますが、いずれも一英との関係から志功を捉える視点に立っています。

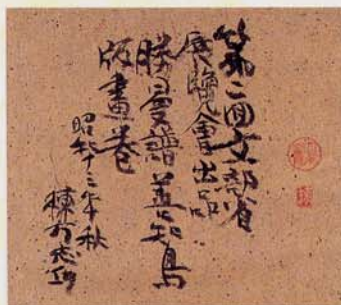
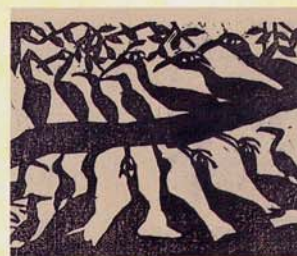
本作品は昭和十三年春制作の「善知鳥版画巻」全三十一柵中より九柵を選んだもので、同年秋の第二回新文展に出品して、版画としては史上初めて特選を受賞した作品です。文展とは明治四〇年に創設された文部省美術展覧会の略称で、現在法人組織である日展の原型です。購入作品は、右段上から下に向かって、「座鬼の柵」「北下の柵」「夜訪の柵」、中段上から、「連枝の柵」「風乗の柵」「陸奥の柵」、左段上から「蓑笠の柵」「妻立の柵」「終の柵」です。左下にあるのは文展出品を明記した表題で、これは唯一のもので、非常に貴重なものといえます。

作品の題材となったのは、志功の郷土青森を舞台にした謡曲「善知鳥」です。志功は、彼の極めて有力な後援者であった愛知県西枇杷島出身の水谷良一からこの謡曲の教えを受け、版画巻を制作しました。「善知鳥」は修羅物といわれる能で、死後に修羅道で苦しむ魂を題材としています。

能は、生前に善知鳥という海鳥の一種を殺した猟師がその報いを受け、地獄で善知鳥の化身に苦しめられる様を表現するものです。修羅物の中でも、凄惨な激しく哀れな物語です。志功は能の持つ幽玄性を白と黒の絶対的対置で表現しつつ、謡曲にはない版画独自の場面も描いたと云い、彼の最高傑作の一つに数えられます。

なお当館では、志功が一英の詩をもとに制作した「大和し美し」版画巻抜粹五柵と「空海頌」を、それぞれ平成十年度に購入しています。

（小野田雅一）





少女習作

作者／佐分眞

制作年／一九三〇年（昭和五）頃

技法・材質・形状／油彩・画布・額装

寸法／五三・〇×四五・五 cm

署名／画面左下にスタンプ [m.Sabouri]

平成十一年度購入

本作品は、第六代一宮町長を父にもつ画家・佐分眞（一八九八一―一九三六）の没後発表された作品で、一九三六年「佐分眞遺作展」、一九七六年「没後四十年佐分眞展」、一九八七年「郷土の画家たちⅢ佐分眞展」（愛知県美術館）、一九九八年「画家達の巴里展」（日立市郷土博物館）などで展観された。また、一九三六年刊行の画集「佐分眞」（春鳥会）に収載されている。

本品は、第一回渡欧期（一九二七―一九三〇）の後期、佐分が帝展で初めて特選を受賞した頃の作品である。少女の穏やかな表情とくつろいだ姿勢、そのよどみのない描き方に作者の落ち着いた

心が感じられ、習作ではあるが、渡欧期の傑作の一つにあげられている。佐分には珍しく、可憐で爽やかな雰囲気を持った作品である。一九三六年刊行の画集には、フランスで佐分と共に学んだ画家・益田義信の次のようなコメントが添えられている。

題名のとおりこれは習作であるが、斯うした習作に色々な発見がある。組立てや何かに頭を使わず、描く事に専心して居る丈けに描き起し方や引きしめ方に大胆な試みが行われて居、やがては大作の重要な素になるのだが、味に於ては得て斯うした習作に秀でたものが多い。

（毛受英彦）

小春日

作者／川合玉堂

制作年／一九〇〇年代初め（明治末―大正）

技法・材質・形状／絹本着色軸装（二重箱入）

寸法／本紙 六八・〇×二七・四 cm

総丈 一四七・五×三九・五 cm

落款／玉堂（印）

伝来／川合修二箱書

平成十一年度購入



川合玉堂（一八七三―一九五七）は、葉栗郡外割田（現・木曾川町）出身の近代日本画家。円山四条派、狩野派の伝統画法を学び、若い頃はその高い技量を示す作品が多く、晩年は枯れた俳画的味わい特徴とする。

彼の絵の神髄は日本の伝統的風景を描いたところにあるが、長い画業の中で実に様々な作品を残している。また、依頼を受けて断ったことがないといわれる程の多作家であったが、膨大な作品は、それぞれに彼固有の情趣、暖かみといったものを示している。愛好者が多く、国民的画家といわれる所以もこの辺りにあるといえる。

この猿回しを描いた作品は、小品だが、軽妙な雰囲気の中に、森狙仙を彷彿とさせるような日本の伝統画法にのっとった高い技量を見ることが出来る。本品のどこにも制作年は記されていないが、その画風および落款から四十代頃の作品と推定される。

なお当館では、戦後の奥多摩時代、昭和二十四年頃制作の風景画「五月雨」と、故川合修二氏（玉堂次男、元玉堂美術館館長）からご寄付いただいたスケッチブック一冊を所蔵している。

（毛受英彦）

の お 知 ら せ

木造阿弥陀如来 及び両脇侍像 三軀

文化財指定の経緯

平成十一年十一月十九日
愛知県指定文化財に指定

中尊である厳しい表情をした木造阿弥陀如来坐像は、鎌倉初期の製作と推定され、昭和三十三年（一九五八）に木造阿弥陀如来坐像として愛知県指定文化財に指定されました。像高は一五〇cm。

両脇侍像については、名称や制作年代が明らかでないなどの理由から県指定文化財とはされず、昭和六十二年（一九八七）に木造観音菩薩立像・木造勢至菩薩立像として市指定文化財に指定されるに留まりました。しかし両脇侍像の胎内から銘文が発見され、不明だった点が明らかになったことやその資料的価値から、中尊と合わせて三軀一括での県の指定文化財となりました。向かって右が観音菩薩立像、左が勢至菩薩立像です。この二像の姿は、阿弥陀如来像の両脇侍の形式としては珍しく、密教の尊像ともいえるべき厳しさを備えています。像高は両像とも一七八cm。



両脇侍像の 胎内銘の発見

現在博物館で公開・展示されているこの阿弥陀三尊は、萩原町中島にある長隆寺に安置



観音菩薩像 胎内銘

されていたものです。長隆寺は、平安時代十一世紀のはじめ頃に開かれたと伝えられる名刹で、かつては大伽藍を備えた大寺院でしたが、その後衰退し、無住の寺院になりました。

長年無住の寺に安置されていた仏像には損傷も多くみられたため、地元の中島文化財委員会が、平成元年・二年の二カ年を費やして本尊を修理し、平成三年（一九九一）四月には両脇侍像の解体修理を、京都の国立博物館構内にある美術院国宝修理所に依頼しました。その際に両像の胎内から墨で書かれた銘文が発見されたのです。この銘文から、従来日光・月光両菩薩ではないかといわれた両脇侍像が観音菩薩像と勢至菩薩像であること、制作されたのが元亨三年（一二三三）であることなどのほか、さまざまなことが判明しました。

発見された銘文は、梵字と像の由来を記した部分とに分かれます。記されている文字数は梵字を除くと、勢至菩薩像が一六九字、観音菩薩像が一八一字です。その大意は「大檀那沙弥承念が、鎌倉幕府の安泰、天下泰平を念じ、長隆寺の開基以来の人々、二親や亡息の菩提と一族の繁栄を念じ、元亨三年十二月に造立した。寺の住職は、東寺（京都）の末弟良充で、仏師は、三条小納言法印常円の息子法橋良円である。」といったところです。両脇侍を寄進した「沙弥承念」の名は妙興寺文書にもみられますが、俗名が不明でした。しかし

観音菩薩の銘文から、「沙弥承念」とは「大介入道俗名長持」であることがわかりました。

長持は、中島氏の惣領であり、国衙の在庁官人でした。妙興寺文書によれば、長持は元応二年（一三二〇）に子の長利への土地の譲状を残しており、長利は貞和五年（一三四九）以降、たびたび妙興寺へその土地を寄進しています。妙興寺は貞和四年（一三四八）中島氏出身の滅宗宗興が創建した寺といわれ、中島氏と長隆寺、妙興寺の関係が浮かび上がってきます。また、長隆寺が中島氏の菩提寺であったこと、当時の長隆寺の住職が京都東寺の末弟、良充であることから、長隆寺の住職と京都の東寺との関わりも窺えます。

両脇侍を制作した仏師も、三条小納言法印常円の息子、法橋良円であるとわかります。法印は僧位の最高位で、法橋は三番目の僧位です。仏像彫刻における鎌倉後期の円派の作品研究の上で、貴重な資料といえます。（谷口 純二）

宮後住吉踊

平成十二年六月二十二日
市無形文化財（芸能）に指定

「住吉踊」とは

住吉踊のもととなったのは大阪の住吉大社のお田植神事といわれ、「住吉踊」自体現在でも住吉大社御田植祭の演目となっています。同社神宮寺の僧が踊り始め、願人あるいは願人坊主とよばれる僧たちが担い手となって諸国を勧進して歩き、ひろめたとされます。江戸時代終わり頃には、十から十五人の一団となり、伊勢音頭を取り入れ、芝居の物まねやおどけ狂言を交えるように変わりました。こうして興行としての性格を強めると、

文 化 財 指 定

各地に招かれ一世を風靡したといえます。「宮後住吉踊」は、そうした興行としての「住吉踊」の流れを汲み、当時の具体的な姿を知ることのできる県内唯一の存在です。

一宮への伝播

「住吉踊」が尾張の町々に伝わった時期は不明ですが、高力種信の『猿猴庵日記』の文化八年（一八一二）に「町々へ、住吉おどり来る」との記述がみえ、文政九年（一八二〇）にも「清寿院にて、住吉おどり興行」とあります。これらから十九世紀にはすでに伝わっていたことが分かります。

一宮に伝わったのは明治の初め頃といわれ、旧一宮市史の下巻には、「明治十五年頃市外西成村瀬部の人を師として当地小島町の人々に住吉踊が習われ、昭和八年西小島寶珠庵境内にその記念碑が建てられた。碑によれば当時小島に師範格五名、門人二十三人を算したが、現在ではあまり行われぬ」とあります。寶珠庵は寶珠寺と名を変えましたが、碑は現在でも境内に建っています。「住吉之碑」とある



段物

その碑には、人名の他は「昭和八年建立」と刻まれるのみで、旧市史の記述がどこに由来するものかは不明です。

住吉踊の名を使っている踊りは、今伊勢町本神戸の名栗や北



手踊り

神明町の小島（現・北神明町三丁目）、西成地区の丹羽、葉栗地区の大毛・笹野・島村、萩原町の二子にもありましたが、現在残っているのは今伊勢町宮後のみです。

「宮後住吉踊」

大正、昭和初期の盛期には、宮後だけでも二〇から三〇人の人々が宮後連中といわれる住吉踊の一座をつくり、練習に励み、春秋の祭りや祝宴の際には各村の招きに応じて踊って歩いたというのですが、現在、今伊勢町宮後地区では、保存会をつくり地域を挙げてこの民俗芸能の伝承に取り組んでいます。上演している演目は、七曲の手踊り（おんど・すがわき・五十三次・江島・深川・かつぼれ・豊年）と、四種の段物（娘道成寺・日高川・新念仏・ひね念仏）といわれる狂言舞踏です。毎年八月には市民会館で開催される「いちのみや民俗芸能のつどい」に参加し、狂言舞踏・手踊りを上演しています。（谷口 純二）

参考文献

- 鈴木道子「尾張の住吉踊と「道成寺」」『中京大学社会学部紀要』第九巻第一号 中京大学社会学部 一九九四年
- 「一宮市史」下巻 一宮市 昭和十四年
- 「一宮市今伊勢町史」今伊勢町史編さん委員会 昭和四十六年

「一宮探検」

一宮駅前のモニュメントで、一宮の歴史や文化などを電光掲示

平成十年度に一宮駅前線、通称銀座通りのシンボルロード整備事業として、ロータリーに電光掲示板が組み込まれたモニュメントが設置されました。モニュメントの電光掲示板では、行政に関するニュースや催し物の案内とともに、当市の歴史や文化などに関わる簡単な情報も表示しています。今回は昨年末にそこで表示された情報を、加筆修正して掲載します。

「真清田神社」

（表示期間：平成十二年十一月十五日～二十八日）
真清田神社は尾張の国の一の宮です。「一の宮」とは、平安時代から用いられている名で、国司がその国に赴任したとき、最初に参拝する神社のことです。歴史の古いこの神社は、由緒伝説に富み、文化財も多数擁しています。一宮市はこの神社の門前町として興り、名前もここに由来します。江戸時代には神社の門前に市を開くことが許され、三と八の日、すなわち三八市が開かれ、当地方の経済発展に寄与しました。（谷口 純一）



真清田神社

これからの博物館

展覧会

秋季特別展 覧忠治

平成12年10月21日(土)～11月23日(木)

収蔵品展 暮らしの道具～今と昔～

平成13年1月6日(土)～2月18日(日)

《催し物》

- ・ホタルカゴとショイネゴザをつくる
- ・ヨモギモチをつくる
- ・コゴメダンゴとコガシとセンバヤキをつくる
- ・ぐいちをつくって遊ぶ

作品展 手つむぎ・染め・織り展

平成13年3月4日(日)～3月18日(日)

平成12年度繊維講座受講生の作品発表会でもある展示会です。同受講生および尾張もめん伝承会員の作品を展示します。

講座

尾張平野を語る5～馬見塚遺跡への系譜

他地域の縄文晩期の遺跡と比較しながら、馬見塚遺跡の特徴を明らかにする講演会です。

平成12年12月3日(日) 文化庁文化財保護部主任調査官 岡村道雄氏

平成12年12月10日(日) 愛知県教育委員会文化財保護室 野口哲也氏

平成12年12月17日(日) 田原本町教育委員会文化財保存課 豆谷和之氏

平成12年12月24日(日) (財)愛知県埋蔵文化財センター 永井宏幸氏

いずれも午後1時30分より

はにわをつくろう

野焼き用の粘土で埴輪を作り、屋外で野焼きします。

粘土代など、1人500円必要となります。

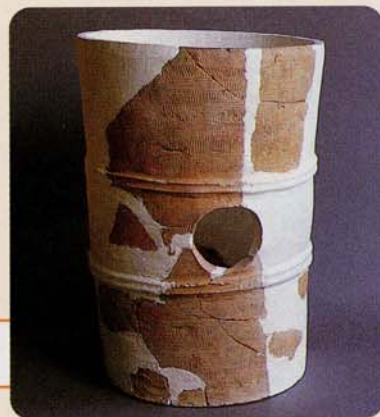
平成13年2月3日(土)・4日(日)・18日(日)

対象 小学校高学年の児童とその親

申込 ハガキに住所、氏名、学年、保護者名、電話番号を記入し、博物館まで送ってください。

応募多数の場合は抽選となります。

〆切 平成13年1月19日(消印有効)



今伊勢町出土の円筒埴輪

公演

島文楽公演

平成13年3月25日(日) 午後1時30分～

一宮市無形文化財である人形浄瑠璃「島文楽」の公演です。

※日程・時間等は変更になる場合がございます。詳しくは下記までお問い合わせください。

利用案内

名鉄名古屋本線【妙興寺】駅下車徒歩7分

〒491-0922 一宮市大和町妙興寺2390

TEL 0586-46-3215 FAX 0586-46-3216

【観覧料】(常設展・聴講料含む・特別展の場合は別途定める。)

一般=200円(160円) 高・大生=100円(80円)

小中生=50円(40円) *()は20人以上の団体料金

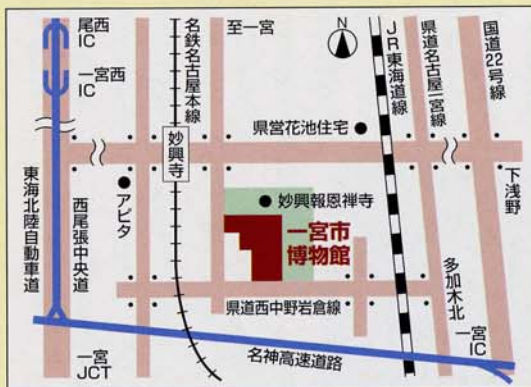
【休館日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

※第2・4土曜日は小・中学生無料。

※65歳以上で、一宮市発行の「老人医療受給者証」

あるいは「シルバー優待証明カード」持参の方は無料。



一宮市博物館だより 第27号
発行日……2000年10月11日
編集・発行……一宮市博物館
印刷……サンメッセ株式会社